



第31回

福岡アジア文化賞

FUKUOKA PRIZE 2021



アジアンパーティは、「アジアと創る」をコンセプトに、
アジアのヒト、モノ、情報が集う社交場をイメージし、
「アジアを知る」アジアマンスからリニューアルして今年で9回目を迎えました。
令和3年度は、「The Creators」や「福岡アジア文化賞」のほか、
オンラインを活用した事業や民間映画祭など、
民間企業・団体等と連携した様々なイベントを全23事業実施しました。



The Creators



特集展示「楽しもう、もっとアジアを! Enjoy Asia More!」(福岡市総合図書館)



アートフェアアジア福岡2021



リトルアジア食堂(吉塚リトルアジアマーケット)

発行

福岡アジア文化賞委員会事務局

〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1 福岡市総務企画局国際部内

TEL 092-711-4930 FAX 092-735-4130

Email: f.prize@io.ocn.ne.jp <https://fukuoka-prize.org/>



学術研究賞

岸本 美緒

KISHIMOTO Mio

(日本/歴史学者)



芸術・文化賞

プラープダー・ユン

Prabda YOON

(タイ/作家、映画作家、アーティスト)



大賞

パラグミ・サイナート

PALAGUMMI Sainath

(インド/ジャーナリスト)

報告書

主催 福岡市、公益財団法人福岡よかとピア国際交流財団
後援 外務省、文化庁

- パキスタン**
- 第7回 **ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン** (カウワーリー歌手)
 - 第17回 **アクシムフティ** (民俗文化保存専門家)
 - 第27回 **ヤスミン・ラリ** (建築家・建築史家・人道支援活動家)
- ネパール**
- 第15回 **ラーム・ダヤル・ラケーシュ** (民俗文化研究者)
- インド**
- 第2回 **ラヴィ・シャンカール** (音楽家・シタール奏者)
 - 第5回 **パドマー・スプラマニヤム** (舞踊家)
 - 第8回 **ロミラ・ターパル** (歴史学者)
 - 第15回 **アムジャッド・アリ・カーン** (サロッド奏者)
 - 第18回 **アシシュ・ナンディ** (社会・文明評論家)
 - 第20回 **パルタ・チャタジー** (政治学・歴史学者)
 - 第23回 **ヴァンダナ・シヴァ** (環境哲学者)
 - 第24回 **ナリニ・マラニ** (アーティスト)
 - 第26回 **ラーマチャンドラ・グハ** (歴史学者・社会学者)
 - 第27回 **A.R.ラフマーン** (作曲家・作詞家・歌手)
 - 第29回 **ティージャン・バーイー** (パンダワニー奏者)
 - 第31回 **パラグミ・サイナート** (ジャーナリスト)
- スリランカ**
- 第13回 **キングスレー・M・デ・シルワ** (歴史学者)
 - 第15回 **ローランド・シルワ** (文化遺産保存建築家)
 - 第19回 **サヴィトリ・グナセーカラ** (法学者)
- バングラデシュ**
- 第12回 **ムハマド・ユヌス** (経済学者)
 - 第19回 **フォリダ・パルビーン** (音楽家)
- タイ**
- 第1回 **ククリット・プラモート** (作家・政治家)
 - 第5回 **スパトラディット・ディッサクン** (考古学・美術史学者)
 - 第10回 **ニティ・イヨウシーウォン** (歴史学者)
 - 第12回 **タワン・ダッチャニー** (画家)
 - 第18回 **シーサク・ワンリポードム** (人類学・考古学者)
 - 第23回 **チャンウィット・カセートシリ** (歴史学者)
 - 第24回 **アビチャップン・ウィーラセタクン** (映画作家・アーティスト)
 - 第28回 **パーサク・ボンパイチット** (経済学者)
 - 第31回 **プラープダー・ユン** (作家、映画作家、アーティスト)
- インドネシア**
- 第2回 **タウフィック・アブドゥラ** (歴史学者・社会学者)
 - 第6回 **クンチャラニグラット** (文化人類学者)
 - 第9回 **R. M. スダルトソ** (舞踊家・舞踊研究者)
 - 第11回 **プラムディヤ・アナンタ・トゥール** (作家)
 - 第23回 **クス・ムルティア・パク・ブウォノ** (宮廷舞踊家)
 - 第25回 **アジュマルディ・アズラ** (歴史学者)
- 米国**
- 第2回 **ドナルド・キーン** (日本文学・文化研究者)
 - 第3回 **クリフォード・ギアツ** (文化人類学者)
 - 第6回 **ナム・ジュン・パイク** (ビデオ・アーティスト)
 - 第9回 **スタンレー・J・タンバイア** (人類学者)
 - 第21回 **ジェームズ・C・スコット** (政治学者・人類学者)
 - 第25回 **エズラ・F・ヴォーゲル** (社会学者)



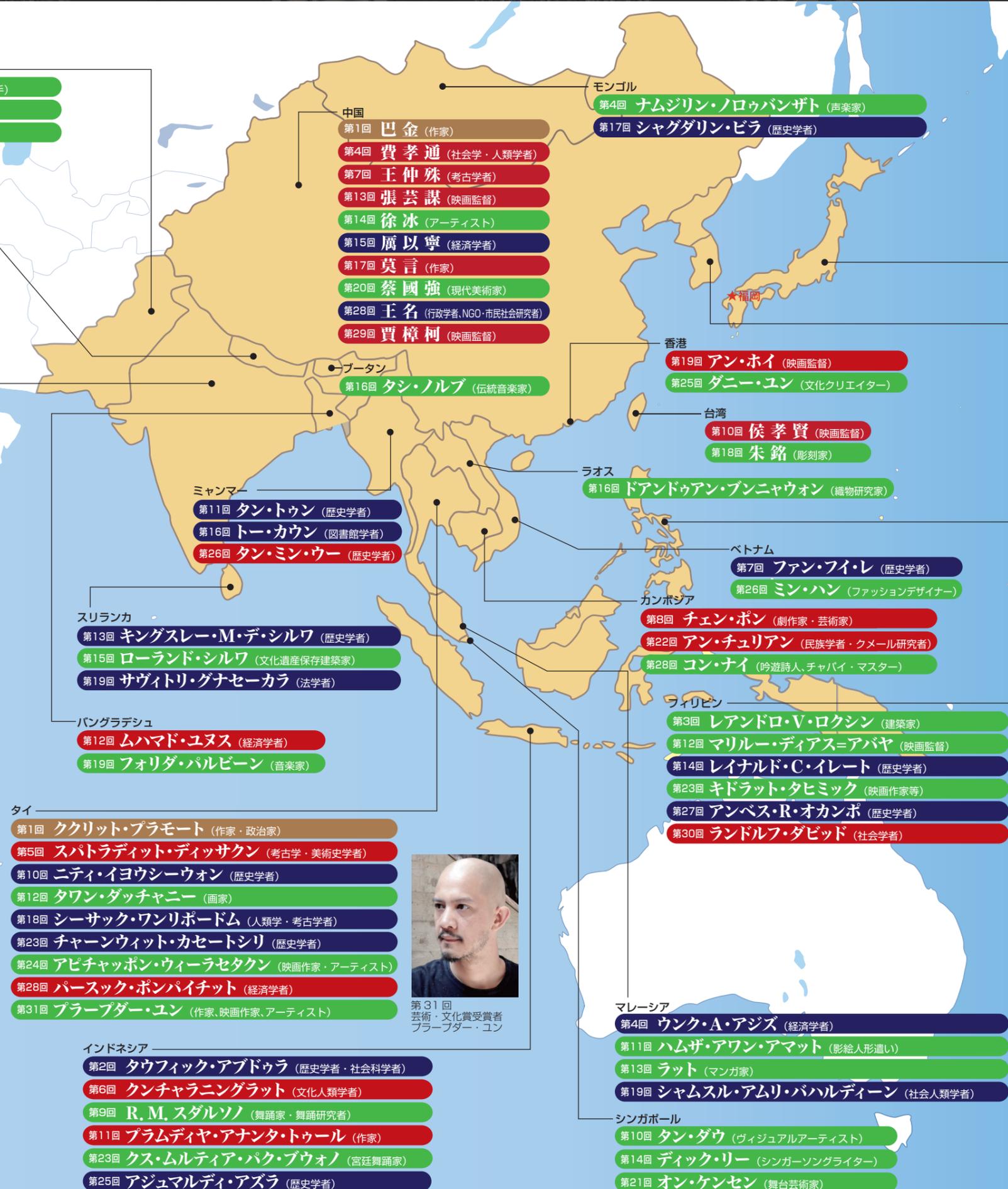
第31回大賞受賞者
パラグミ・サイナート

アジア以外の国・地域

- 英国**
- 第1回 **ジョゼフ・ニーダム** (中国科学史研究者)
 - 第28回 **クリス・ペーカー** (歴史学者)
- アイルランド**
- 第11回 **ベネディクト・アンダーソン** (政治学者)
- オーストラリア**
- 第5回 **王廣武** (歴史学者)
 - 第13回 **アンソニー・リード** (歴史学者)
 - 第24回 **テッサ・モーリス＝スズキ** (アジア地域研究者)
- フランス**
- 第20回 **オギュスタン・ベルク** (文化地理学者)
- ドイツ**
- 第22回 **ニールズ・グッチョウ** (建築史家・修復建築家)
- オランダ**
- 第30回 **レオナルド・ブリュッセイ** (歴史学者[東南アジア史専門家])



第31回
芸術・文化賞受賞者
プラープダー・ユン



- 韓国**
- 第3回 **金元龍** (考古学者)
 - 第6回 **韓基彦** (教育学者)
 - 第8回 **林権澤** (映画監督)
 - 第9回 **李基文** (言語学者)
 - 第16回 **任東権** (民俗学者)
 - 第18回 **金徳洙** (伝統芸能家)
 - 第21回 **黄秉冀** (音楽家)
 - 第22回 **趙東一** (文学者)



第31回
学術研究賞受賞者
岸本 美緒

CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者 1-2

福岡アジア文化賞とは 3-4

第31回受賞者

- 大賞 **パラグミ・サイナート** 5
- 学術研究賞 **岸本 美緒** 6
- 芸術・文化賞 **プラープダー・ユン** 7

授賞式 8~12

市民フォーラム

- パラグミ・サイナート 13
- 岸本 美緒 14
- プラープダー・ユン 15

受賞者による学校訪問 16

歴代受賞者名鑑 17~22

福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバル化時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を

創設しました。以来、アジアのほぼ全域にわたり、多くの素晴らしい受賞者の功績を顕彰しています。

未来へつなげる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

1. 目的 アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2. 賞の内容

大賞

賞金 ¥5,000,000

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体を対象としています。

学術研究賞

賞金 ¥3,000,000

人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。

芸術・文化賞

賞金 ¥3,000,000

アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。

3. 対象圏域 東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4. 主催 福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団*



*福岡よかトピア国際交流財団: アジア太平洋博覧会「福岡'89」の成功を記念するとともに、アジアに開かれた福岡の歴史、文化、その他の特性を生かした国際交流を促進する活動を行うことにより、市民一人ひとりが多様性を認め合いながら国際的な相互理解を深める多文化共生社会の実現に寄与し、地域の発展と国際平和に貢献することを目的としています。

福岡アジア文化賞委員会委員

2021年10月現在 委員は五十音順、敬称略

特別顧問	曾根 健孝	外務省国際文化交流審議官	//	小松 浩子	日本赤十字九州国際看護大学学長
//	都倉 俊一	文化庁長官	//	酒見 俊夫	西部ガスホールディングス株式会社代表取締役会長
//	服部 誠太郎	福岡県知事	//	朔 啓二郎	福岡大学学長
名誉会長	高島 宗一郎	福岡市長	//	佐藤 靖典	特定非営利活動法人福岡市レクリエーション協会副会長
会長	谷川 浩道	(公財)福岡よかトピア国際交流財団理事長	//	柴田 建哉	西日本新聞社代表取締役社長
副会長	石橋 達朗	九州大学総長	//	柴戸 隆成	株式会社福岡銀行取締役会長兼頭取
//	伊藤 嘉人	福岡市議会議員	//	傍田 賢治	日本放送協会福岡拠点放送局長
//	中村 英一	福岡市副市長	//	多田 昭重	福岡文化連盟会長
監事	中村 郁子	福岡市会計管理者	//	豊馬 誠	九州電力株式会社代表取締役副社長
//	橋本 淳	福岡市社会福祉協議会常務理事	//	中井 一平	読売新聞西部本社顧問
委員	浅見 昭彦	日本経済新聞社常務執行役員西部支社代表	//	西村 松次	株式会社九電工取締役会長
//	江口 勝	福岡県副知事	//	星子 明夫	福岡市教育委員会教育長
//	大滝 敏之	朝日新聞社執行役員西部本社代表	//	山口 剛司	福岡市議会副議長
//	河原畑 徹	九州運輸局長	//	米田 健三	九州経済産業局長
//	唐池 恒二	九州旅客鉄道株式会社代表取締役会長執行役員	//	若菜 英晴	毎日新聞社取締役西部本社代表
//	北島 己佐吉	九州産業大学学長	//	綿貫 英彦	福岡市議会総務財政委員会委員長
//	久保田 勇夫	西日本フィナンシャルホールディングス取締役会長	//	G. W. パークレー	西南学院大学学長
//	倉富 純男	西日本鉄道株式会社代表取締役会長			

第31回福岡アジア文化賞 審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会

委員長 / 石橋 達朗
九州大学総長

副委員長 / 中村 英一
福岡市副市長

委員 / 石坂 健治
日本映画大学教授
東京国際映画祭シニア・プログラマー

委員 / 後小路 雅弘
北九州市立美術館館長
九州大学名誉教授

委員 / 清水 展
関西大学特任教授
京都大学名誉教授

委員 / 竹中 千春
立教大学法学部教授

委員 / 柄 博子
国際交流基金理事

委員 / 土屋 直知
株式会社正興電機製作所
代表取締役会長

福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞

委員長 / 清水 展
関西大学特任教授
京都大学名誉教授

副委員長 / 竹中 千春
立教大学法学部教授

委員 / 木宮 正史
東京大学大学院
総合文化研究科教授

委員 / 河野 俊行
九州大学理事・副学長

委員 / 清水 一史
九州大学大学院
経済学研究院教授

委員 / 高原 明生
東京大学大学院
公共政策学連携研究部教授

委員 / 新田 栄治
鹿児島大学名誉教授

委員 / 脇村 孝平
大阪経済法科大学
経済学部教授

福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞

委員長 / 石坂 健治
日本映画大学教授
東京国際映画祭シニア・プログラマー

副委員長 / 後小路 雅弘
北九州市立美術館館長
九州大学名誉教授

委員 / 内野 儀
学習院女子大学日本文学学科教授
東京大学名誉教授

委員 / 宇戸 清治
東京外国語大学名誉教授

委員 / 小川 忠
跡見学園女子大学文学部教授

委員 / 寺内 直子
神戸大学大学院
国際文化学研究所教授

委員 / 西村 幸夫
國學院大学教授

委員 / 松隈 浩之
九州大学大学院
芸術工学研究院准教授

2021年10月現在 委員は五十音順、敬称略



PALAGUMMI Sainath

パラグミ・サイナート

インド/ジャーナリスト(People's Archive of Rural India創立編集者)

主な経歴	
1957	インド、チェンナイ(旧マドラス)生まれ
1977	マドラス、ロヨラ・カレッジ卒業(歴史学)
1979	ニューデリー、ジャワハルラール・ネルー大学修士(歴史学)
1980-82	United News of India副エディター
1982-93	Blitz group of Publications副編集長・海外担当エディター
1982-86	ムンバイ、The Dailyの海外担当エディター(1986年まで、Blitz groupの一部)
2000-	チェンナイ、Asian College of Journalismにて非常勤で教鞭をとる
2004-14	The Hindu地方問題担当エディター
2011	カナダ、アルバータ大学名誉博士(文学)
2012	アメリカ、プリンストン大学客員教授(McGraw Professor of Writing)
2014	People's Archive of Rural India設立
2014-	People's Archive of Rural India設立編集者
2015	プリンストン大学南アジア研究プログラム客員教授
2017	カナダ、ノバスコシア州聖フランシスコ・ザビエル大学名誉博士(文学)

その他、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校とアイオワ大学、オーストラリアのカーティン大学、カナダのウェスタンオンタリオ大学等で教鞭をとったことがあり、現在もインドのムンバイにあるソフィア・ポリテクニク大学とチェンナイにあるアジア・カレッジ・オブ・ジャーナリズムでは毎年講師を務めている。

主な受賞歴

1993	The Sri Raja-Lakshmi Award for Journalism	2002	Global Visions Inspiration Award
1994	The Statesman Prize for Rural Reporting	2004	Prem Bhatia Memorial Prize
1995	欧州委員会 ロレンツォ・ナタリ賞(ジャーナリズム)	2006	ハリー・チェイピン メディア賞
1995	People's Union of Civil Liberties(PUCL)Human Rights ジャーナリズム賞	2007	ラモン・マグサイサイ賞
2000	アムネスティ・インターナショナル世界人権ジャーナリズム賞	2009	Ramnath Goenka Prize for Excellence in Journalism, ジャーナリスト・オブ・ザ・イヤー
2000	BD Goenka Prize for Excellence in Journalism	2014	世界メディアサミットグローバルアワードフォーエクセレンス賞
2001	国連食糧農業機関 Boerma Prize		

主な著作

・*Everybody loves a good drought: stories from India's poorest districts*, Penguin India, 1996.

氏を題材にしたドキュメンタリー映画

・*A Tribe of His Own: The Journalism of P. Sainath*(2002年), Joe Moulins 脚本・監督
 ・*Nero's Guest*(2009年),Deepa Bhatia 監督

贈賞理由

パラグミ・サイナート氏は、グローバリゼーションの中で急激な変動を続けるインドで貧しい農村を調査し、「農民の物語」を伝え続ける、気骨のジャーナリストである。2014年よりデジタル・ジャーナリズムのプラットフォームとして「People's Archive of Rural India(農村インド民衆文書館)」を立ち上げ、多様な文化を持つ農村社会の情報を収集し、多言語で発信する独自の取り組みを行ってきた。

チェンナイ(旧マドラス)に生まれたが、一族の故郷はアーンドラ・プラデーシュ州で、第4代大統領V・V・ギリ氏を祖父に持つ。ジャワハルラール・ネルー大学院大学で、古代史の大家であり第8回福岡アジア文化賞学術研究賞を受賞したロミラ・ターパル教授に師事し、歴史学を修めた。

ジャーナリズムの道に進み、UNI通信社の後、政治雑誌『ブリッツ』で副編集長まで務めた。インド型社会主義と呼ばれた独自の混合経済から新自由主義的な市場経済への「改革」を進めた1990年代、フリーランスのジャーナリストとして『タイムズ・オブ・インド』紙に「インドの貧困の顔」を連載した。84もの記事を束ねた主著*Everybody loves a good drought*(みんな干ばつが好き)(1996年)は、世界中から絶賛された。1995年の欧州委員会ロレンツォ・ナタリ・メディア賞、2000年のアムネスティ・インターナショナルのグローバル人権ジャーナリズム賞と2001年の国連食糧農業機関のベルマ賞などを受賞し、2007年にはアジアの傑

出したジャーナリストなどに贈られるラモン・マグサイサイ賞を受賞した。

輝かしい経歴にもかかわらず、サイナート氏の地道な「知」の技法は変わらない。丹念に農村を歩き、人々の話を聞いて情報を集め、カメラのシャッターを切り、貧困や災害の真相を描き出す。2004-2014年には『ザ・ヒンドゥー』紙の農村問題担当編集者として活躍した。氏の仕事を撮影したドキュメンタリー映画*A Tribe of His Own*(彼の一族)(2002年)や*Nero's Guests*(ネロの賓客)(2009年)が制作され、国際的に注目された。また、農村改革への熱意ゆえに、連邦政府や州政府のアドバイザーも務めた。

知日派でもあり、2003年に国際交流基金・国際文化会館共催のアジア・リーダーシップ・フェロー・プログラムのフェローとして来日し、多くの人々と交流し、京都・大阪・広島などに足を伸ばし、代表作の写真展を開催して話題となった。2019年に再訪した際には東日本大震災後の被災地取材し、講演会では今日の農村問題を熱く語った。

若い世代に格差社会と農村の現実を伝えるため、国内外の大学で教鞭を執っている。昨年来、新型コロナウイルス感染症のパンデミックと貧窮の二重苦にあえぐ農村取材し、民衆の助け合いを訴えて多忙な日々を送っている。激動に揺れるアジアの中で、「知」と市民的連帯を追求するパラグミ・サイナート氏は、まさに「福岡アジア文化賞 大賞」にふさわしい。



KISHIMOTO Mio

岸本 美緒

日本/歴史学者(お茶の水女子大学名誉教授、東洋文庫研究員)

主な経歴	
1952	東京都生まれ
1975	東京大学卒業(文学部東洋史学専修課程)
1977	東京大学大学院修士号(人文科学研究科東洋史学専門課程)
1977-79	東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専門課程博士課程
1979-81	東京大学東洋文化研究所助手
1981-85	お茶の水女子大学文教育学部専任講師
1985-89	お茶の水女子大学文教育学部助教授
1989-96	東京大学文学部助教授
1996-97	東京大学文学部教授
1997-2007	東京大学大学院人文社会系研究科教授
1998-	公益財団法人 東洋文庫研究員
2007-15	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授
2015-18	お茶の水女子大学基幹研究院教授
2018-	お茶の水女子大学名誉教授
2019-	日本学術振興会学術システム研究センター 副所長

その他、京都大学や大阪大学をはじめ多くの国内大学において、また海外では国立清華大学(台湾)において、非常勤講師・客員教授を担当。

主な著作

・『清代中国の物価と経済変動』研文出版、1997。(中国語版『清代中国の物価と経済変動』(劉迪瑞氏訳・胡連成氏審校)国家清史編纂委員会・編訳叢刊, 社会科学文献出版社,2010.)

・『東アジアの「近世」』山川出版社(世界史リブレット), 1998.

・『世界の歴史 12 明清と李朝の時代』(共著)中央公論社, 1998。(中公文庫版, 2008.)(ハングル版『朝鮮と中国近世五百年をゆく一國史を超えた東アジア読解』(金炫榮・文純実氏訳)ソウル・歴史批評社, 2003.)

・『明清時期的民事審判と民間契約』(共著)法律出版社, 1998.

・『明清交替と江南社会——17世紀中国の秩序問題』東京大学出版会, 1999.

・『中国社会の歴史的展開』放送大学教育振興会, 2007。(増補改訂版『中国の歴史』ちくま学芸文庫, 筑摩書房, 2015.)

・『風俗と時代観 明清史論集1』研文出版, 2012.

・『地域社会論再考 明清史論集2』研文出版, 2012.

・『詳説世界史:世界史B』(共著)山川出版社, 2017。※改訂版

・『新世界史:世界史B』(共著)山川出版社, 2018。※改訂版

・『小学館版学習まんが 世界の歴史4 古代中国1』『小学館版学習まんが 世界の歴史5 古代中国2』『小学館版学習まんが 世界の歴史14 ゆれる中国』(監修)小学館, 2018.

・『礼教・契約・生存 明清史論集3』研文出版, 2020.

・『明末清初中国と東アジア近世』岩波書店, 2021.

贈賞理由

たのか明らかになっている。

岸本氏の歴史研究が一貫して問いかけてきたのは、そもそも完全ではない人間から成り立つ社会において、如何にして「秩序」が形成されるのかという問題であり、中国史にとどまらず、「東アジアの近世」論という、より拡がりのある歴史像を提起した点も斬新であった。中国では紆余曲折を経つつ17世紀前半に誕生した満洲人王朝である清朝の支配のもとで一定の社会的安定がもたらされ、日本では16世紀(戦国・織豊期)の混沌の時代から17世紀前半(徳川期)の安定の時代へと移り変わった。このように中国のみならず日本や朝鮮を含めた東アジアの規模で、半ば同種の歴史のリズムが経験されたというのである。

岸本氏の研究業績は、中国史を専門とする海外の研究者にも高く評価されてきた。また、数多くの編著および共著における編集と執筆を通して、日本の歴史学界全体に大きな影響を与えてきた。近年においても、氏はこれまでの論叢を集成した三冊の明清史論集、そして「明末清初」期に関するこれまでの考察をまとめた単著『明末清初中国と東アジア近世』(2021年)を刊行し、旺盛に研究活動を続けている。さらに、教科書の編集・執筆、そして次世代への歴史教育への貢献なども高く評価される。東アジアの国際関係が困難な局面を迎える今日において、長期的な視野から、中国社会に生きる人々の姿を、<内>と<外>との両方の視点から見つめてきた岸本美緒氏は、まさに「福岡アジア文化賞 学術研究賞」にふさわしい。



Prabda YOON

主な受賞歴

- 2002 東南アジア文学賞 最優秀短編集賞(『可能性』)
- 2017 タイ、シラバートン賞(文芸部門)

主な映像作品

- ・『地球で最後のふたり』2003.(脚本)
- ・『インビジブル・ウェーブ』2006.(脚本)
- ・『Motel Mist』2016.(監督、脚本)
- ・『現れた男』2017.(監督、脚本)
- ・『Bangkok Breaking』2021.(共同脚本、製作総指揮)

プラブダー・ユン

タイ/作家、映画作家、アーティスト

主な経歴

- 1973 タイ、バンコク生まれ
- 1988 中学を卒業後渡米
- 1997 米国、クーバー・ユニオン大学学士号(美術)
- 1997- ニューヨークにてグラフィックデザイナーとして活動
- 1998 兵役のためにタイに帰国
- 2000 短編集『直角の都市』、『可能性』を出版し、ともにベストセラー
- 2002 初の長編小説 *Chit-tak!* を発表
- 2002-17 現代英語文学のタイ語への翻訳活動(『ロリータ』、『時計仕掛けのオレンジ』、『ライ麦畑でつかまえて』)
- 2003-05 タイで最も影響力のある雑誌 *Open Magazine* 共同編集者兼アートディレクター
- 2004-06 日本の雑誌『EYESCREAM』や『STUDIO VOICE』、『Esquire Japan』などにて日本の文化に関する物語やエッセイを連載
- 2005 出版社 Typhoon Books 設立
- 2009 日本財団フェロー(プロジェクトテーマ:日本とフィリピンの現代美術と文化に見られる自然汎神論の新たな兆候)
- 2012-15 バンコク・クリエイティブ・ライティング・ワークショップ デイレクター
- 2013-17 タイ出版書店協会(PUBAT) 副会長
- 2014 有限会社 Bookmoby TVプロデューサー
- 2015-17 アジア太平洋出版協会(APPA) 会長
- 2015- 映画作家(監督)として活動

主な著作(小説、エッセイ)

- 小説
 - ・『直角の都市』LIPS, 2000.
 - ・『可能性』Soodsubda, 2000. [邦訳:所収『鏡の中を数える』]
 - ・『地球で最後のふたり』ソニーマガジズ, 2004.
 - ・『鏡の中を数える』タイフーン・ブックス・ジャパン, 2007.
 - ・『パンダ』東京外国語大学出版会, 2011.
 - ・『色 Colors』(共著)芸術新聞社, 2013.
 - ・『ベースメント・ムーン』Typhoon, 2018.
- エッセイ
 - ・『座右の日本』タイフーン・ブックス・ジャパン, 2008.
 - ・『新しい目の旅立ち』Typhoon Books, 2015. [邦訳:株式会社ゲンロン, 2020.]

贈賞理由

プラブダー・ユン氏は、タイを代表する作家の一人である。氏は1998年以降、精力的に小説を発表し続けているほか、評論家、脚本家、エッセイスト、翻訳家、グラフィックデザイナー、イラストレーター、写真家、ミュージシャンとしても活躍するマルチクリエイターであり、日本文化に造詣が深いタイ知識人でもある。

プラブダー氏は1973年にバンコクに生まれた。父は英字新聞社のオーナー、母は女性誌の編集長であった。中学を卒業後に渡米、ニューヨークのクーバー・ユニオン大学で芸術の学士号を修得し、兵役に就くため1998年にタイに帰国した。氏はその後、新聞や雑誌コラム、短編の執筆などを経て、大都会に蠢く風変わりな群像を描いた初の短編集『直角の都市』(2000年)を刊行した。同時に発売された短編集『可能性』(2000年)が、新奇な文体と表現技法、社会から孤立した都会人を描いた内容、実験的な装丁などで世間の注目を浴び、2002年の東南アジア文学賞を受賞した。当時のタイは経済発展に伴って都市中産階級が伸張し、映画、芸術、食文化等の分野で海外に「タイのアイデンティティ」を盛んに喧伝した時代であり、著名人を両親に持つセレブリティと、米国帰りの都会センス溢れるクリエイターであった氏を新世代の旗手であると見なす「プラブダー現象」とも呼べるブームが起きた。その後の氏は、多くの小説、エッセイ、外国文学翻訳を発表し、良質の作品を持続的に生み出せる本格作家であることを証明した。氏が脚本を担当し、日本の俳優が主演した『地球で最後のふたり』(2003年)など2本の映画は、日本を含む各国の国際映画祭で上映され注目を集めた。

都会派作家としてのプラブダー氏の思想的遍歴は、『新しい目の旅立ち』(2015年)で一つの到達点に至った。この作品は、氏が日本財団の助成金を得て訪れた、「黒魔術の島」と呼ばれる、地元の祈禱師や元教師の日本人が暮らすフィリピンのシキホール島での人間・自然観察と内観によって獲得した世界認識、オランダの哲学者スピノザの思想との対話、米国のナチュラリストであるソローが実践した森の生活への考察によって構成され、哲学的思索と文芸的技法の融合から、現代の都市人としてのアイデンティティを興味深く描き出した。

プラブダー氏は、日本の雑誌『EYESCREAM』に2004年から3年間寄稿したエッセイで等身大の日本人、日本文化を紹介し、思い込みや誤解があったタイの日本観に新たな視座を与えた。「日本は私の恋人である」と公言する氏の日本滞在は多数回に及び、大学の夏期講習で禅思想や『方丈記』など古典文学を学んだり、茶道に親しんだりしている。氏は、出版社と書店を経営したり、アジア太平洋出版者協会会長やタイ出版者・書籍販売業者協会副会長を務めたこともある。

プラブダー氏はアジア作家の中では邦訳数が多い作家の一人である。英、仏、伊、中国語訳もあり、氏に対する世界の関心は高い。氏の創作活動は、タイ文学・思想の発展に寄与するだけでなく、日本理解の更新にも貢献している。人類が人間と自然の調和を図る持続可能な生存様式を模索する中、アジアの作家として今後の人類のあり方への哲学的考察を深めるプラブダー・ユン氏の功績はまさに「福岡アジア文化賞芸術・文化賞」にふさわしい。



授賞式

日時:2021年9月29日(水) 18:30~19:15 形式:無観客開催、オンライン(LIVE)配信

会場:ホテルオークラ福岡4階 平安の間

式次第

オープニング(映像)

受賞者紹介

主催者代表挨拶

福岡市長 高島 宗一郎

おことば(ビデオメッセージ)

秋篠宮皇嗣殿下

受賞者の功績紹介(映像)

贈賞

福岡市長 高島 宗一郎

(公財)福岡よかトピア国際交流財団理事長 谷川 浩道

受賞者スピーチとインタビュー

花束贈呈



プロジェクションマッピングと連動した華やかなオープニング映像で、壮大に幕を開けた福岡アジア文化賞授賞式。昨年の延期を経て開催された今年の授賞式は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため関係者のみで執り行い、海外受賞者は自国からオンライン出席となりました。その様子はライブ配信され、秋篠宮皇嗣妃両殿下を始め、国内外の多くの方々にご視聴いただきました。

式典では、まず初めに受賞者の紹介があり、大賞のバラグミ・サイナート氏と芸術・文化賞のブラーブダー・ユン氏がスクリーン上、学術研究賞の岸本美緒氏が会場ステージに登場。アジア文化の保存と創造に貢献した3名が勢揃いすると、会場は祝福の拍手で包まれました。

次に主催者を代表して高島宗一郎福岡市長が挨拶。「多様性がより重視されるこれからの時代において、アジア地域の多様な文化と価値を広く伝える福岡アジア文化賞の役割は、これまで以上に重要なものとなっていく」と述べました。



プロジェクションマッピングを用いたオープニング

続いて秋篠宮皇嗣殿下より、ビデオメッセージでお祝いのおことばを賜りました。

受賞者の輝かしい功績が映像で紹介された後は、高島市長と谷川浩道福岡よかトピア国際交流財団理事長より、賞状とメダルが授与されました。サイナート氏及びブラーブダー氏にはスクリーン越しに、岸本氏にはステージ上での贈呈となりました。

続いて受賞者スピーチでは、各々が視聴者に向けて感謝の言葉と素晴らしいメッセージをおくり、インタビューでは、和やかな雰囲気の中、受賞者の熱い想いや人柄が感じられるエピソードなどが語られました。

最後に改めて受賞者がスクリーンとステージに登場。関係者や多くの視聴者に見守られる中、花束が贈呈されました。オンラインという新しい形で国内外へ届けられた第31回福岡アジア文化賞授賞式は、会場に華々しく紙吹雪が舞う中、感動のうちに幕を閉じました。



受賞者登壇



高島市長による主催者代表挨拶



受賞者の功績紹介の様子



大賞のバラグミ・サイナート氏への贈賞



学術研究賞の岸本美緒氏への贈賞



芸術・文化賞のブラーブダー・ユン氏への贈賞



オンライン参加者の様子

秋篠宮皇嗣殿下おことば



このたび、第31回福岡アジア文化賞において、大賞を受賞されるバラグミ・サイナート氏、学術研究賞を受賞される岸本美緒氏、そして芸術・文化賞を受賞されるブラーブダー・ユン氏に心からお祝いを申し上げます。

昨年は、COVID-19の感染拡大により授賞式が延期になり、このたびオンラインを活用して31回目の式典が行われ、皆様にご挨拶できますことを誠に嬉しく思います。

ただ、第15回より毎年出席をし、受賞者からそれぞれの活動や研究について直接お話を伺うことは、私にとりまして貴重な機会でありましたので、本年受賞される皆様にお目に掛かれないことは誠に残念な思いです。この困難な状況が収束し、皆様を日本に、そして福岡にお迎えできる日が来ることを切に願っております。

「福岡アジア文化賞」は、古くからアジア各地で受け継がれている多様な文化を尊重し、その保存と継承に貢献するとともに、新たな文化の創造、そしてアジアに関する学術研究に寄与することを目的として、それらに功績のあった方々を顕彰するために創設されました。爾来、アジアの文化とその価値を世界に示していく上で、顕著な役割を果たしてこられました。これまでの輝かしい受賞者の中には、アジア地域に限らず、世界各地で活躍されている方が多くおられることは、皆様のご存じのことと思います。

私自身、アジアの国々をたびたび訪れ、多様な風土や自然環境が創り出し、長い期間にわたって育まれてきた各地固有の歴史や言語、民俗、芸術など、文化の深さや豊かさに関心をもち、それらの保存・継承、更なる発展の大切さと、アジアを深く理解するための学術の重要性を強く感じてまいりました。また、人と人との直接的な交流が制限されているこの時期において、本賞がアジアの文化の価値とそれらについての学術的な側面を伝えていくことは、大変意義の深いことと考えます。

その意味でも、本日受賞される3名の方々の優れた業績は、広く世界に向けてその意義を示し、また社会全体でこれらを共有することによって、次の世代へと引き継ぐ人類の貴重な財産になりましょう。

終わりに、授賞式の開催に向けて尽力された皆様に敬意を表しますとともに、この福岡アジア文化賞を通じて、アジア諸地域に対する理解、そして国際社会の平和と友好がいつそう促進されていくことを祈念し、授賞式に寄せる言葉といたします。



授賞式をオンラインでご視聴される秋篠宮皇嗣妃両殿下(秋篠宮邸にて)

大賞

パラグミ・サイナート



困難の中で取材を続ける
ジャーナリスト仲間へ捧げる

私が知っている中で最も権威ある賞の一つである福岡アジア文化賞の大賞を受賞できたことは、私にとって非常に誇らしい瞬間です。私にとってこの受賞は、ジャーナリズムやメディアが果たすことができる、そして果たすべき社会的な役割を証明するものです。

新型コロナウイルス感染症拡大が続く今日、人々は今まで以上にジャーナリズムを必要としています。残念ながらメディアは人々の期待に全く応えていません。商業的なメディア企業は数万人ものジャーナリストやメディア関係者を解雇し、いつものように人々よりも利益ばかりを追い求めて

います。恵まれない人々の健康や暮らしに何が起きているのか、正確で規則的な報道がなされないために、噂話や間違った情報が世界を支配しています。そのため、私のようなジャーナリストに福岡アジア文化賞の大賞が贈られることは、株主のためではなく人々のために、企業のためではなく地域のために奉仕することへの正当性の証だと考えています。

この賞は私にとって本当に大切なものです。この賞をジャーナリストの仲間たちに捧げられることを誇りに思います。私の仲間たちは計り知れない困難に立ち向かいながらも、パンデミックで壊滅的な被害を受けた何百万人もの農村の人々取材し、人々の物語を伝え続けています。特に PARI (農村インド民衆文書館) の同僚たちは、移民や労働者、農民を始め、土地を持たない人々、アーティスト、職人、漁師、そして貧しい人々の立場から報道を続けています。世界中の農村が衰退していく光景を目の当たりにする中、彼らは私に希望を与えてくれます。

このような栄誉を与えてくださった福岡市の皆様と福岡市に、心から感謝を申し上げます。ありがとうございます。

学術研究賞

岸本 美緒



ダイナミックな世界に魅かれ
続けてきた歴史研究が
未来に役立つことを願って

このたびは、とてもスケールの大きな素晴らしい活動をしていらっしゃるお二人とともに福岡アジア文化賞という素晴らしい賞をいただくことができました。驚くとともに大変光栄に存じております。古来、アジア諸地域との深い関係を持ってきた福岡というこの地において、このような大きな意義を持つ賞を創設し、育ててこられた皆様、そしてそれを支えておられる福岡市民の皆様、心より感謝と敬意を表したいと思います。

私は子どもの頃から中国の文化や歴史のダイナミックな状況に非常に魅力を感じて

おり、割合自然に中国史研究の道に入りましたが、本来それほど大きなビジョンがあったわけではなく、ただ、数百年前の大変動の時代に生きた普通の人々の不安や希望、喜びや悲しみを身近に感じられることのワクワク感にひきつけられて、こつこつとこれまで研究を続けてまいりました。しかしその中で、世界各地の同業者の方々、さらに日本史、西洋史や人文社会科学の様々な分野の研究者の方々と交流する機会を与えていただき、自分が勉強してきたことが思いがけない大きな世界的な広がりや、今日とのつながりを持つことがだんだんとわかってまいりました。

16世紀・17世紀の世界に生きてきた人々に比べて、今日の私たちは、外国の社会や文化について格段に広い知識を持っています。しかし、先の見えない大きな変動期に際し、不安や希望を抱きながら手探りで未来を作っていくという点については同じです。人間社会の経験を跡付けてゆく歴史研究というものが、ささやかながらそのために役に立つことを願いつつ、感謝の言葉としたいと思います。どうもありがとうございました。

芸術・文化賞

プラープダー・ユン



イマジネーションで
若者たちに励ましと希望を

福岡アジア文化賞芸術・文化賞をいただくにあたり、心から感謝申し上げます。私の創作活動を認め、また長年の取組が正しかったのだと思わせてくださったことを、大変ありがたく光栄に思います。今回の受賞は、これまで私の作品に価値を見いだしてくださった多くの方々の支えなくしては、成し得なかったことです。私の作品に心を留めてくださったすべての皆様のおかげです。また、私より遥かに卓越した岸本先生やサイナート様とともにこの場に立てることも、大きな栄誉であり喜びです。そして、私を支えてくれる最愛の家族にも心から感謝しています。

まだ子どもであった私が芸術に興味を持ったころ、周りはクリエイティビティ(創造力)には否定的でした。絵を描くこと、映画を見ること、小説やコミック本が好きなることを後ろめたく感じさせられたものでした。ですから当時、創造すること・思い描くことには価値があると教えてくれる大人が一人か二人でもいてくれたことは、この上なく意味のあることでした。「君には才能がある」「いいアーティストになる」と言ってくれた先生たちのことを決して忘れることはありません。今の私があるのは、そのような大人が希望をくれたからです。このような自らの経験があるからこそ、作品を通して特に若者に語りかけること、問題を抱えて疑心暗鬼になっている若い心にどうにかして希望を届けることを、常に大切にしてきました。

この賞を私の国、日本、そして世界中の若者に捧げます。イマジネーション(思い描く力)は、現実を作る設計図だと私は確信しています。ですから、若者たちに励ましを贈りたいと思います。そしてより良い未来を思い描くことを諦めないでほしいと言いたい。希望はあるのです。

Interview

質問：歴史学を修めたのち、ジャーナリズムの道に進んだのはなぜですか。
サイナート氏：歴史を学ぶことは私自身と私が実践しているジャーナリズムに最も不可欠な要素の一つです。インドの独立闘争の歴史を見ても、ガンディーをはじめ偉大な運動家の多くがジャーナリストとしても活動していました。独立闘争と報道は密接に絡み合っていたため、歴史学修士号を取った後、ジャーナリズムの道へ進むことはとても論理的なことだと考えました。

質問：PARIの活動と役割についてお聞かせください。
サイナート氏：現在世界中で、農村が社会から取り残されています。インドでは人口の69%が農村部に住んでいるにもかかわらず、農村部に関する記事は日刊紙の一面では、わずか0.67%しかありません。この結果、インドの若い世代は自分の国をよく知らない外国人として育ってしまうのです。PARIはこの問題と向き合い、解決するために存在しています。今日PARIはインドの農村に関する知識の宝庫であり、農村と学生たちや都市部に住む人々との繋がりをもう一度作ろうとしているのです。

質問：あなたの活動の原動力は何ですか。
サイナート氏：インドは独立から75年目を迎えますが、インドの独立と自由をめぐる最大級の戦いがインドの農村で繰り広げられたことはあまり知られていません。インドの農村は植民地支配に最も強く抵抗した場所だったのです。独立闘争を戦った人たちの価値観、そして現代の人々と彼らの願いをつなげたいという思いが私の最も大きな原動力となっているのです。



Interview

質問：岸本さんが感じる中国の文化や歴史の魅力とはどのようなものですか。
岸本氏：一つ一つの字が感覚に訴えてくる漢文に、子どもの頃から魅力を感じて歴史書「史記」に出てくる強烈な個性を持つつかり合ったり結び合ったりしながら歴史が

質問：なぜ、皇帝や英雄ではなく、普通で来たのでしょうか。
岸本氏：やはり身近に共感をもって感じら

れるのは、普通の人々の希望や不安と中で、一人ひとりの庶民がより良い生活彼らの行動が寄り集まってやがて大きな表現してみたいと思ったわけです。

質問：私たちがこの時代を生きていくために
岸本氏：過去の世界の多様なあり方について、一定の知識と感覚を身につけることによって今後の私たちの選択が安定したバランスのとれたものになると思います。歴史は過去の人類の経験が作り上げた地図のようであり、その中で私たちがどこにいるのかを知ることは、今後の選択の役に立つのではないかと考えております。



Interview

質問：スピーチにあった「大人がくれた希望」とは、具体的にどのようなものだったか。
プラープダー氏：10歳くらいの頃の出来事です。絵を描く授業で、私は空や草や木などを普通は使わない色で描きました。それを見た先生はクラスのみんなに見せて、「これはクリエイティビティ(創造力)を使って描いた作品だよ」と言ったのです。今でも忘れられない出来事で、クリエイティビティを追求してこういう気持ちになった日でした。

質問：幅広い分野で活躍する原動力は何ですか。
プラープダー氏：クリエイティブなことならなんでも興味が湧くし、好奇心がそそられます。何か作りたいという気持ちが湧き上がってきます。これは、日々の決まりきった生活とは違う何かを作りたい、生み出したい、経験したいという衝動ですね。それまでそこになかったものを実際のものにする。これはとても人間らしい衝動だと思います。

質問：現在そしてこれからの未来、創作的な活動にはどんな役割があるのでしょうか。
プラープダー氏：先ほどのスピーチでも言ったように、アートは希望を与えることができると考えています。これは今の時代にはとても重要で、絶望の底から私たちを引き上げる一つの道しるべとなり得ると考えています。



大賞 市民フォーラム

パラグミ・サイナート インド／ジャーナリスト

第一部 基調講演

商業化したメディアから民衆のためのジャーナリズムを取り戻そう



民衆の、民衆による、民衆のための新たなデジタル・ジャーナリズムを展開し、インド社会の中で埋もれてしまいがちな貧しい農民の物語に目を向け続けているパラグミ・サイナート氏。市民フォーラムの第一部では、NGO「農村インド民衆文書館(PARI)」を「デジタル革命の探求である」と述べ、PARIの活動をテーマに基調講演が行われました。

まずサイナート氏は、メディアによるジャーナリズムは一部の力を持つ人々によって握られており、またそのほとんどが企業であることから、ジャーナリズムは正義でもなく民衆のものでもなく、収入の源泉になり下がってしまったと問題提起しました。2004年の津波被害では被害状況や援助した国については報道されましたが、多くの人が被害を受けたその一方で一部の人が膨大な富を得たという事実が報道されることはなかったと語りました。同じような不平等はCOVID-19によるパンデミックの状況でも起きていることをあげ、常に被害を受けているのはごく普通の人々や貧しい人々であるとし、「今こそジャーナリズムの主導権を民衆に取り戻す時だ」と主張しました。

次に、サイナート氏の活動の拠点となるPARIの報道のあり方を、映像を交えながら紹介しました。地方の農民、労働者、漁業者、森にすむ人々、芸術家など、普通に生活する人々と触れ合い、信頼を勝ち取り、生活に密着しながら草の根的な活動で人々の「日々の声」を拾い上げ、実体験を報道していく。その地道な取材方法を明らかにしました。映像では、素潜りで海藻を採る女性、気候変動で砂漠化が進む地域、自分たちでラジオ局を作って気候変動について学び・報道している漁民たち、コロナ禍で医療に従事する人々などを紹介。気候変動やパンデミックが引き起こしたインドの人々の現状を詳細に語りました。

そして、現在インドにおいて重要な問題の一つは、75年前のインド独立のために闘った人たちが高齢のためにこの世を去っていることだと訴えました。かつて自由を得るために戦った「自由の戦士」は最高齢者が104歳となっていることをあげ、「子どもたちが独立の戦いのことを聞く機会がなく、戦いがあったことさえ知らない子どもたちが増えていることは非常に重要な問題だ」と締めくくりました。

「民衆の歴史文書館をつくろう ～インド発、NGO ジャーナリズムの挑戦」

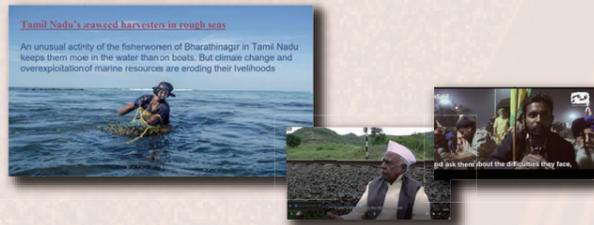
- 実施日/2021年10月13日(水)17:00~18:30
- 形式/オンライン(LIVE)配信
- 参加者/オンライン392名
- 共催/九州大学

第二部 対談

社会の現実をしっかりと捉え人々の真実を映し出す



モデレーター 竹中千春
(立教大学法学部教授)



第二部は竹中千春氏と対談し、サイナート氏が撮影した写真を見ながら、インドの人々の生活や取材活動について触れました。

多くの写真を撮影してきたサイナート氏は、カメラを通して相手の思いやハートにフォーカスしているのであり、真実の物語はジャーナリストと取材相手のマインドが作り出すものであると伝えました。取材では事実から逃げないことが重要であり、人々との信頼関係を築くことで真実の写真が撮れるのだと解説しました。

また現代社会における女性の労働についての過酷さや不平等があることを問題視し、全ての女性に学校へ行く権利を与える必要性があると話しました。

最後に、30年間以上ジャーナリストとして関わってこられたのは、信頼できる仲間がいたからこそだと感謝を述べ、「この30~40年で、世の中にも人々の心の中にも不平等は広がっているが、これから、社会的にも政治的にも文化的にもジェンダー的にも、正義＝平等の時代がやってくるのではないかと希望に満ちたメッセージを送りました。

第三部 質疑応答

第三部は、一般参加者から寄せられた質問にサイナート氏が答える質疑応答です。福岡、東京、海外から、PARIの活動やインドの民主主義、インドでのコミュニケーションの取り方など多様な質問が寄せられると、サイナート氏は一つひとつ丁寧に答え、予定時間を越えるほど力が入った話が繰り返されました。

参加者の声

- 気候変動による人々への影響やインドで行われている活動など今まで知ることのなかった新しい知識を身につけられた。
- サイナート氏の常に市民側に立ったジャーナリズム精神が随所に感じられて感銘深いスピーチだった。
- メディアからだけでは物事の全容を知ることが出来ないからこそジャーナリズムの存在が重要であることが分かった。

学術研究賞 市民フォーラム

岸本 美緒 日本／歴史学者

第一部 基調講演

同時代の世界的な流れをひも解く



「東アジアの近世」という括りのある歴史像を提起している岸本美緒氏。この日は、16世紀後半から18世紀初期の中国に光を当て、不安と希望の入り混じる中で生きる人々の姿とともに、東アジアの規模で同種の歴史のリズムが経験されたというグローバルな文脈について、講演が行われました。

まず、「日本の統一と清朝の成立」として、明末清初期の中国について、同時期の日本や東南アジアで何が起こっていたのかを交えながら岸本氏が解説。明の特色として、対外的な交易関係について政府が管理する朝貢関係に制限されていたことをベースに、モンゴルの侵入、銀の流入、倭寇の活動から、16・17世紀の東アジアに北方と南方それぞれに交易・戦争地帯が形成されたことを挙げ、同じ頃、中国周辺に新興勢力が次々と現れたことも、分かりやすい図版と共に示しました。特に、「日本では1590年の豊臣秀吉による全国統一の後、江戸幕府が265年間存続、同じ頃、中国では女真人(満州人)であるヌルハチが建国した金がその後の清となり267年存続」という同時代の同種の歴史のリズムは、参加者の関心を集めました。リズムだけでなく、新興勢力の共通点として「対外交渉の積極性」「軍事競争」「異文化接触」「強力で現実主義的なリーダーシップ」という興味深い視点も、岸本氏より示されました。

次に、「伝統社会の特質」として、16世紀後半～17世紀前半を混乱・戦争の時期、17世紀後半～18世紀を新国家の確立・安定期と位置付けたいうえで、中国と日本それぞれの「伝統社会」の特質の相違について、民族構成、身分と集団、経済システムという3つの視点から、岸本氏が比較していきました。その中で示された清代の皇帝や街の様子が描かれた図版も参加者の目を引いていました。

最後に、「共通の世界史のリズム?」として、中国や日本で見られる16世紀後半～18世紀の歴史のリズムはヨーロッパにも当てはまるのかという問いかけをし、対談へとつながっていきました。

「明末清初期の中国、そして世界」

- 実施日/2021年10月9日(土)16:00~17:30
- 形式/会場開催、オンライン(LIVE)配信
- 会場/福岡大学A棟401教室
- 参加者/会場61名・オンライン322名
- 共催/福岡大学



対談者 高澤 紀恵
(法政大学文学部教授)



コーディネーター 脇村 孝平
(大阪経済法科大学経済学部教授)

第二部 対談

日本、中国、フランス、インド 比較研究で得られる新たな視点

岸本氏と学術的な交流を長年続け、近世フランス社会史・都市史を専門とする高澤紀恵氏との対談が行われました。高澤氏は現在、他地域との比較研究にも取り組んでおり、その活動の原点は岸本氏との若い頃の出会いであるとし、「他領域の研究者と話すことは、思わぬ所からボールが飛んで来てその方向を見上げる感覚と似ています。これまで見えてなかったものに気付く、固定化されたイメージが変われるかもしれないのが刺激的です」と語りました。今回は、岸本氏がその研究で、一貫して問いかけている「秩序」を巡っての対談となりました。現代の日本社会では“あつて然るべき”と考えられている「秩序」が、近世フランスや明末清初期においてどのように捉えられているか、脇村氏の専門であるインド社会経済史、アジア経済史での見解を交えながら対談は展開していきました。さらに身分や宗教が「秩序」を形作るのに果たした役割といった視点からも比較。岸本氏は「自分達の文化の外の広い世界を知って討論し、社会を見直す。知識を皆で共有し、話し合いながら見直していく足掛かりの一つになれば、と考えています」と語り、時間が足りないほど盛り上がりを見せた対談は閉幕となりました。



参加者の声

- 歴史は現在にも通じる、さらに未来にも通じるものだと痛感した。
- 明末清初期の中国の混乱と安定がどういった意味を持つのか、中国史、東アジア史、世界史の視点から読み解かれており、歴史学を学ぶうえで示唆にあふれる話を聞くことができた。
- 先生がどのような関心からどのように物事を捉えようとしているのか、その研究の奥深さと広さの一端を知ることができた。

芸術・文化賞

市民フォーラム

プラープダー・ユン

タイ／作家、映画作家、アーティスト

- 実施日／2021年10月2日(土)12:00～17:10(プレイベント含む)
- 形式／会場開催、オンライン(LIVE)配信
- 会場／福岡市総合図書館映像ホール・シネラ
- 参加者／会場延 168名・オンライン 448名
- 共催／福岡市総合図書館 / 映像ホール・シネラ実行委員会

第一部 講演・対談

タイ作家が表象した日本と日本人



講演冒頭でプラープダー氏は「私は現代日本文化とともに育った世代のタイ人である」と切り出し、日本のポップカルチャーが多くのタイ人に影響を与えていると語りました。欧米でも多くの芸術家が日本の芸術・文化にインスピレーションを受けていると知った氏は、そうした経験から近代及び伝統的な日本の美に導かれ、日本文化への傾倒によって自身のアジア人としてのルーツを見出したといいます。

続いて芸術・文化のプロパガンダ的要素に言及したプラープダー氏。芸術・文化の世界的広がりには何らかの政治・経済的意図があるとしながらも、プロパガンダは人の心を完全に形作ることはできないと説きました。ここで氏は、かつて美術教師から「美しく見えるのであれば、間違いもそのままに下さい」と教えられ、その間違いを『ハッピーアクシデント』と言われたエピソードを紹介。芸術がときに『ハッピーアクシデント』を引き起こし、異文化の影響が芸術の目的やプロパガンダを越えて、『可能性の窓』を開けるということを示唆しました。

さらに、新型コロナウイルスによる未曾有の経験が、私たちに様々な啓示や気づきを与えているというプラープダー氏。芸術が職業としてだけでは存在できないこと、特定の人たちだけの活動でも機能しないことに気付いた氏は、芸術を一般大衆と結びつけた社会的行為であると称しました。

そして、このコロナ禍を人生について考える良い機会と捉え、願わくはもう少し生活に芸術を取り入れてほしい、自国の文化を誇りにしつつ他の文化にもオープンであってほしいと語り、講演を締めくくりました。

講演の後は、宇戸氏・久保田氏(福岡会場)と画面越しの対談。プレイベントで上映した映画の話題を中心に、当時のタイの社会背景、日本や日本人のイメージ等について質疑が交わされました。このうち、映画の主人公たちの設定(言葉の壁)について問われると、氏は「意思さえあれば、言葉の障壁を越えられるこ

とを示したかった」と答えました。

プラープダー氏の視点から見た、日本と日本人、芸術の意義、そして異文化に接するという。第一部は、これらの氏の考えに触れると同時に、氏の思慮深さ、繊細さや表現の奥深さにも強く惹きつけられた時間となりました。



コーディネーター 宇戸 清治
(東京外国語大学名誉教授)



対談者 久保田 裕子
(福岡教育大学教授)

第二部 文学講座

世界文学としてのタイ文学

初めに福富氏(オンライン出演)が、プラープダー氏作品の特徴やテーマについて紹介。続いて氏を中心に、事前に寄せられた参加者の質問に回答しつつ、作品の内容を掘り下げながら、氏が捉えている日本文化の独自性等について活発な意見が交わされました。

話が盛り上がる中、宇戸氏が「真の旅人として、タイ文化に衝撃を与え続けてほしい」とプラープダー氏に提案すると、氏は「私はまさに旅人。今の仕事に満足していないし、今後も創作活動をより良くするために新たな可能性を探索し続けたい」と今後の活動についても言及。久保田氏からは、プラープダー氏のように小説にとどまらず映画・映像へと文学が横断的に表現されることが世界文学としての在り方ではないかと語られました。



コーディネーター 福富 渉
(株式会社ゲンロン所属)

参加者の声

- プラープダー氏のこれまでの経歴、業績の詳細だけでなく、アートに対する見方や、日本観などがわかる内容で、とても興味深かった。
- 普段決して聞くことのできない作品の執筆経緯などを、作家本人の言葉で詳しく聞かせてもらうことができ、大変感激した。
- 作品について様々な見方を披露いただき、さしたる知識もなく参加した私にとって、タイ文学に興味を沸かした。

プレイベント 映画上映

『地球で最後のふたり』LAST LIFE IN THE UNIVERSE

2003年 / タイ・日本・オランダ・フランス・シンガポール / 107分 / 35mm

監督・脚本: ベン・エグ・ラッタナルアーン 脚本: プラープダー・ユン

タイのリゾート地を舞台に、互いの兄妹の死をきっかけに出会った国籍の異なるふたりが、つたない言葉と心を通じ合い、心を通じついでいく過程を描いた静謐なラブストーリー。主演は、本作でベネチア国際映画祭コントロロンテ部門主演男優賞に輝いた浅野忠信。ほか、出演者にシニター・ブンヤサック、松重豊など。



©2003 bohemian films, Inc.

受賞者による学校訪問

大賞

パラグミ・サイナート

インド／ジャーナリスト

■実施日／9月30日(木) 14:10～15:40

■会場／春吉中学校

パラグミ・サイナート氏はインドからオンラインで参加し、生徒たちは各教室で配信を見ながら交流会に参加しました。交流会第1部では、「新型コロナウイルスの状況下で、不平等についてもう一度考える」をテーマに、インド国内で起きているワクチンの不平等や経済的な不平等について、グラフや写真を交えながら講演。生徒たちは、じっくりと画面に見入りながら真剣に耳を傾けました。

交流会第2部では3名の生徒代表と、「これからの福岡・アジア・世界をよりよい場所にするために何をすべきか」についてのディスカッション。はじめに生徒がちょっと緊張しながらも英語で自己紹介。続いて、1学期の授業で調べたこと考えたことを発表しました。サイナート氏からは「皆さんの感受性の素晴らしさに感動した。希望をもらった」とメッセージが送られるとともに、その気づきをどう次のステップにつなげていくかというアドバイスをもらい、有意義な時間となりました。



学術研究賞

岸本 美緒

日本／歴史学者

■実施日／10月8日(金) 17:00～18:30

■会場／九州大学 伊都キャンパス

会場に集まった学生や大学院生、教員を前に、「明清史からみる現代中国—市場・世論・国家統合」というテーマで講演が行われました。あわせてオンラインによる聴講も実施。参加者のなかには、中国の歴史に興味を持つ高校生も。岸本氏の「16～17世紀の歴史研究をしている立場から、今の中国の動きを理解するための、何かヒントが与えられればと思います」という言葉で講演がスタート。「市場」「世論」「国家統合」の観点から、明清時代の経済や社会政策、多民族統合などについて、時おりマトリクスや地図、当時の絵画を用いるなどして、詳しくそして分かりやすく講演は進められ、最後に現代中国研究と歴史研究との対話の必要性を提起して、結びとなりました。

講演後は、「国家がその正統性を維持するために世論つまり多数の批判を重視し、政策が時にはキャンペーンの形で行われたという話が興味深かった」などの感想が聞かれたほか、「明清の経済が世界経済に与えた影響は」などの質問も。岸本氏は一つ一つに対し丁寧に回答。参加者は「歴史のなかの中国」と「現代の中国」をつなぐ、深い知識を吸収した時間となりました。



芸術・文化賞

プラープダー・ユン

タイ／作家、映画作家、アーティスト

■実施日／9月30日(木) 13:45～15:00

■会場／福岡女子高等学校

タイからオンライン出演したプラープダー氏。「高校時代は創造力を培うのに最も良い時期である」というテーマで、時折ユーモアを交えながら講演が行われました。プラープダー氏は、自身の高校時代の経験として、日本の漫画やアニメなどのポップカルチャーから、浮世絵や茶道といった伝統文化まで幅広く興味を持ち、その追求に多くの時間を費やしたと振り返り、当時得た知識は現在の活動に役立っていると語りました。「高校時代は人生の土台を作る大事な時期であり、興味があることに今を有効に使ってほしい」という熱いメッセージに生徒たちは真剣に耳を傾けていました。

その後、生徒たちは自身が作成したパワーポイントで、福岡市の名所や祭事を英語で紹介。「福岡は大好きなまちの一つ」と語るプラープダー氏は、各プレゼンテーションの内容や手法を称賛し、新たに知る福岡市の魅力に興味を示しました。また、マルチクリエイターならではの鋭い視点から見たプレゼンの改善点やアドバイスもあり、生徒たちは熱心に聞き入っていました。有意義で活発な交流に、笑顔があふれる時間となりました。





福岡アジア文化賞 歴代受賞者名鑑

FUKUOKA PRIZE Roll of Honor 1990 - 2019

第1回

1990

創設特別賞

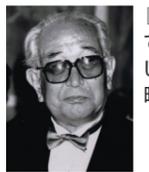
巴金
BA Jin
(中国 / 作家)



『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

創設特別賞

黒澤明
KUROSAWA Akira
(日本 / 映画監督)



『羅生門』をはじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

創設特別賞

ジョゼフ・ニーダム
Joseph NEEDHAM
(英国 / 中国科学史研究者)



中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞

ククリット・プラモート
Kukrit PRAMOJ
(タイ / 作家・政治家)



大河小説『王朝年代記』ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞

矢野 暢
YANO Toru
(日本 / 社会学者)



日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回

1991

大賞

ラヴィ・シャンカール
Ravi SHANKAR
(インド / 音楽家・シタール奏者)



豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

学術研究賞

タウフィック・アブドゥラ
Taufik ABDULLAH
(インドネシア / 歴史学者・社会学者)



東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究者で知られる歴史学者、社会学者。

学術研究賞

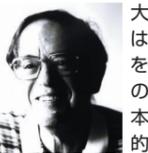
中根 千枝
NAKANE Chie
(日本 / 社会人類学者)



アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、『タテ社会論』等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞

ドナルド・キーン
Donald KEENE
(米国 / 日本文学・文化研究者)



大著『日本文学史』はじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

第3回

1992

大賞

金元 龍
KIM Won-yong
(韓国 / 考古学者)



東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞

クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ
(米国 / 文化人類学者)



インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞

竹内 實
TAKEUCHI Minoru
(日本 / 中国研究者)



社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN
(フィリピン / 建築家)



東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

第4回

1993

大賞

費孝通
FEI Xiaotong
(中国 / 社会学・人類学者)



中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の的方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞

ウンク・A・アジズ
Ungku A. AZIZ
(マレーシア / 経済学者)



マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞

川喜田 二郎
KAWAKITA Jiro
(日本 / 民族地理学者)



ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の的方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞

ナムジリン・ノロウバンザト
NAMJILYN Norovbanzad
(モンゴル / 声楽家)



モンゴルの伝統的な民謡オルティンドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

第5回

第6回

第7回

第8回

第9回

第10回

大賞

スパトラディット・ディッサクン
M. C. Subhadradis DISKUL
(タイ / 考古学・美術史学者)



タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界的地位づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞

王 廣武
WANG Gungwu
(オーストラリア / 歴史学者)



華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞

石井 米雄
ISHII Yoneo
(日本 / 東南アジア研究者)



タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞

パドマー・スブラマニヤム
Padma SUBRAHMANYAM
(インド / 舞踊家)



インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設定など教育面にも貢献。

大賞

クンチャラニングラット
KOENTJARANINGRAT
(インドネシア / 文化人類学者)



インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞

韓 基 彦
HAHN Ki-un
(韓国 / 教育学者)



独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞

辛島 昇
KARASHIMA Noboru
(日本 / 歴史学者)



刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞

ナム・ジュン・パイク
Nam June PAIK
(米国 / ビデオ・アーティスト)



テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

大賞

王 仲 殊
WANG Zhongshu
(中国 / 考古学者)



古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞

ファン・フイ・レ
PHAN Huy Le
(ベトナム / 歴史学者)



イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

学術研究賞

衛藤 藩 吉
ETO Shinkichi
(日本 / 国際関係研究者)



中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン
Nusrat Fateh Ali KHAN
(パキスタン / カウワーリー歌手)



イスラーム宗教歌謡カウワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

大賞

チェン・ボン
CHHENG Phon
(カンボジア / 劇作家・芸術家)



内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞

ロミラ・ターバル
Romila THAPAR
(インド / 歴史学者)



独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞

樋口 隆 康
HIGUCHI Takayasu
(日本 / 考古学者)



フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞

林 権 澤
IM Kwon-taek
(韓国 / 映画監督)



韓国の苦難の近代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

大賞

李 基 文
LEE Ki-Moon
(韓国 / 言語学者)



韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞

スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH
(インド / 人類学者)



タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞

上田 正 昭
UEDA Masaaki
(日本 / 考古学者)



日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞

R. M. スダルソノ
R. M. Soedarsono
(インドネシア / 舞踊家・舞踊研究者)



芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

大賞

侯 孝 賢
HOU Hsiaohsien
(台湾 / 映画監督)



厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て『悲情城市』などの名作を生んだ世界的な映画監督。

学術研究賞

大林 太 良
OBAYASHI Taryo
(日本 / 民族学者)



日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究的泰斗。

学術研究賞

ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG
(タイ / 歴史学者)



斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

芸術・文化賞

タン・ダウ
TANG Da Wu
(シンガポール / ヴィジュアルアーティスト)



独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第11回 2000

大賞
プラムディヤ・アナンタ・トゥール
 Pramodya Ananta TOER
 (インドネシア/作家)



『人間の大地』は、はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で、民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

学術研究賞
タン・トゥン
 Than Tun
 (ミャンマー/歴史学者)



厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

学術研究賞
ベネディクト・アンダーソン
 Benedict ANDERSON
 (アイルランド/政治学者)



世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

芸術・文化賞
ハムザ・アワン・アマット
 Hamzah Awang Amat
 (マレーシア/影絵人形遣い)



マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン(影絵人形遣い)。

第16回 2005

大賞
任東権
 IM Dong-kwon
 (韓国/民俗学者)



韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

学術研究賞
トー・カウ
 Thaw Kaung
 (ミャンマー/図書館学者)



貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文書保存学の泰斗。

芸術・文化賞
ドアン・ウアン・ブンニャウ・ウォン
 Douangdeuane BOUNYAVONG
 (ラオス/織物研究者)



ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究者。

芸術・文化賞
タシ・ノルブ
 Tashi Norbu
 (ブータン/伝統音楽家)



ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

第12回 2001

大賞
ムハマド・ユヌス
 Muhammad YUNUS
 (バングラデシュ/経済学者)



『グラミン銀行』を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

学術研究賞
速水 佑次郎
 HAYAMI Yujiro
 (日本/経済学者)



市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ『速水開発経済学』とも称される学問体系を構築した。

芸術・文化賞
タワン・ダッチャニー
 Thawan DUCHANEE
 (タイ/画家)



タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

芸術・文化賞
マリルー・ディアス=アバヤ
 Marilou DIAZ-ABAYA
 (フィリピン/映画監督)



民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第17回 2006

大賞
莫言
 MO Yan
 (中国/作家)



現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。2012年ノーベル文学賞受賞。

学術研究賞
シャグダリン・ピラ
 Shagdaryn BIRA
 (モンゴル/歴史学者)



世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

学術研究賞
濱下 武志
 HAMASHITA Takeshi
 (日本/歴史学者)



アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

芸術・文化賞
アクシム・ムフティ
 Uxi MUFTI
 (バキスタン/民俗文化保存専門家)



『ローク・ヴィルサ』を創設しバキスタン文化の基盤を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第13回 2002

大賞
張芸謀
 ZHANG Yimou
 (中国/映画監督)



現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

学術研究賞
キングスレー・M・デ・シルヴァ
 Kingsley M. DE SILVA
 (スリランカ/歴史学者)



スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学に多大な貢献をした歴史学者。

学術研究賞
アンソニー・リード
 Anthony REID
 (オーストラリア/歴史学者)



『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新天地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

芸術・文化賞
ラット
 Lat
 (マレーシア/マンガ家)



マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭い諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第18回 2007

大賞
アジシュ・ナンディ
 Ashis NANDY
 (インド/社会・文明評論家)



臨床心理学と社会学を統合させた独自の的方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

学術研究賞
シーサク・ワンリポドム
 Srisakra VALLIBHOTAMA
 (タイ/人類学・考古学者)



関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

芸術・文化賞
朱銘
 JU Ming
 (台湾/彫刻家)



深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求め創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

芸術・文化賞
金徳洙
 KIM Duk-soo
 (韓国/伝統芸能家)



『サムルノリ』を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第14回 2003

大賞
外間 守善
 HOKAMA Shuzen
 (日本/沖縄学者)



『沖縄学』を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

学術研究賞
レイナルド・C・イレート
 Reynaldo C. ILETO
 (フィリピン/歴史学者)



東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

芸術・文化賞
徐 冰
 XU Bing
 (中国/アーティスト)



独創的な『偽漢字』や『新英文書法』の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

芸術・文化賞
ディック・リー
 Dick LEE
 (シンガポール/シンガーソングライター)



シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第19回 2008

大賞
アン・ホイ
 Ann HUI
 (香港/映画監督)



幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のパイオニア。

学術研究賞
サヴィトリ・グナセーカラ
 Savitri GOONESEKERE
 (スリランカ/法学者)



南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績を挙げ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

学術研究賞
シャムスル・アムリ・バハルディーン
 Shamsul Amri Baharuddin
 (マレーシア/社会人類学者)



民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにおいて一貫してリードする社会人類学者。

芸術・文化賞
フォリダ・バルビーン
 Farida Parveen
 (バングラデシュ/音楽家)



バングラデシュの伝統的な宗教歌謡バウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

第15回 2004

大賞
アムジャッド・アリ・カーン
 Amjad Ali KHAN
 (インド/サロッド奏者)



インド古典弦楽器『サロッド』演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

学術研究賞
厲以寧
 LI Yining
 (中国/経済学者)



中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

学術研究賞
ラーム・ダヤル・ラケーシュ
 Ram Dayal RAKESH
 (ネパール/民俗文化研究者)



ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

芸術・文化賞
ローランド・シルヴァ
 Roland SILVA
 (スリランカ/文化遺産保存建築家)



イコモス(国際記念物遺跡会議)委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第20回 2009

大賞
オギュスタン・ベルク
 Augustin BERQUE
 (フランス/文化地理学者)



欧日の人間社会と空間・景観・自然に対する哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

学術研究賞
パルタ・チャタジー
 Partha CHATTERJEE
 (インド/政治学・歴史学者)



正統な歴史から振り落とされてきた『声なき人々』の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきた政治学・歴史学者。

芸術・文化賞
三木 稔
 MIKI Minoru
 (日本/作曲家)



邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。

芸術・文化賞
蔡國強
 CAI Guoqiang
 (中国/現代美術家)



北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

第21回

2010

大賞

黄秉冀
HWANG Byung-ki
(韓国/音楽家)



韓国の伝統的楽器「伽倻琴(カヤグム)」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。

学術研究賞

ジェームズ・C・スコット
James C. SCOTT
(米国/政治学者・人類学者)



東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。

学術研究賞

毛里 和子
MORI Kazuko
(日本/現代中国研究者)



アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した。政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

オン・ケンセン
ONG Keng Sen
(シンガポール/舞台芸術家)



現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く。世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

第26回

2015

大賞

タン・ミン・ウー
Thant Myint-U
(ミャンマー/歴史学者)



グローバルな視点からミャンマーの歩みを綴る傑出した歴史家であるとともに、歴史的建造物の保存や持続可能な都市計画に取り組み、自国の平和創造をめざす知的指導者。

学術研究賞

ラーマチャンドラ・グハ
Ramachandra GUHA
(インド/歴史学者・社会学者)



民衆の側に立った「環境史」の地平を切り開き、また、多様性を抱える大国インドの複雑な歴史を丁寧に辿り民主主義の実像を描いた著書でも知られる、インドを代表する歴史家。

芸術・文化賞

ミン・ハン
Minh Hanh
(ベトナム/ファッションデザイナー)



ベトナム固有の少数民族の刺繍や織物を融合させた現代的なデザインを創造し、若手育成や市場開拓に取り組みながら、ファッション文化の発展に貢献するデザイナー。

第22回

2011

大賞

アン・チュリアン
ANG Choulean
(カンボジア/民族学者・クメール研究者)



「カンボジア人によるカンボジア研究」の立場から、長い歴史に立脚した生活文化要素を自らの民族感性で解明。さらにアンコール遺跡群の救済事業における国際的枠組みをつかったカンボジアを代表する民族学者。

学術研究賞

趙東一
CHO Dong-il
(韓国/文学者)



主著『韓国文学通史』全6巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評され、研究領域は儒教・漢字文化圏全域に及ぶ。韓国、日本、中国、ベトナムの比較文学・比較文明の研究者。

芸術・文化賞

ニールズ・グツショウ
Niels GUTSCHOW
(ドイツ/建築史家・修復建築家)



南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を学際的研究から高次の哲学的営為として昇華させ先導してきた建築史家・修復建築家。

第27回

2016

大賞

A.R.ラフマン
A. R. RAHMAN
(インド/作曲家・作詞家・歌手)



民族性豊かな南アジアの伝統音楽と西洋のクラシック音楽、現代の大衆音楽を大胆に融合させた個性的な楽曲で、映画音楽の新境地を開拓する世界的に有名なインドの国民的アーティスト。

学術研究賞

アンベス・R・オカンボ
Ambeth R. OCAMPO
(フィリピン/歴史学者)



著書やメディアを通じた発言等を通じ、フィリピンの歴史をわかりやすく伝え、市民の国際感覚の育成に寄与するなど、フィリピンの学術・文化・社会の発展に大きく貢献している歴史学者。

芸術・文化賞

ヤズミン・ラリ
Yasmeen LARI
(パキスタン/建築家・建築史家・人道支援活動家)



数多くの歴史的建造物の保存修復活動や、地震や水害等の災害に対して低コストで環境にやさしいシェルターの提供を行うなど人道支援活動にも尽力した、パキスタン初の女性建築家。

第23回

2012

大賞

ヴァンダナ・シヴァ
Vandana SHIVA
(インド/環境哲学者)



開発やグローバル化の脅威を鋭く指摘し続け、自然を慈しみ、生命の尊厳を守る斬新な思想を語り、多くの民衆を導いてきた環境哲学者。

学術研究賞

チャーンウィット・カセートシリ
Charnvit KASETSIRI
(タイ/歴史学者)



アユタヤ史の研究において傑出した業績をあげたほか、タイ近現代史の研究成果を教育に取り入れ、活発な啓蒙活動を行う東南アジアを代表する歴史学者。

芸術・文化賞

キドラット・タヒミック
Kidlat Tahimik
(フィリピン/映画作家・アーティスト・文化観察者)



途上国フィリピンに生きる者の矜持と文化帝国主義批判を独特のユーモアに包んで描く作品群を発表してきた、アジアの個人映画作家の先駆的存在。

芸術・文化賞

クス・ムルティア・パク・ブウォノ
G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono
(インドネシア/宮廷舞踊家)



幼少よりジャワ文化を深く学び、300年に及ぶ伝統的宮廷舞踊を広く世に紹介するとともに、中部ジャワ伝統文化の保存と発展に尽力してきた、宮廷舞踊の継承者。

第28回

2017

大賞

パスック・ボンパイットおよびクリス・ベーカー
Pasuk PHONGPAICHT & Chris BAKER
(タイ/経済学者) & (英国/歴史学者)



タイ社会が直面する問題を政治と経済、社会と文化など多面的に分析した共同研究は傑出しており、多大な社会貢献をしてきたタイの代表的知識人。

学術研究賞

王名
WANG Ming
(中国/行政学者、NGO・市民社会研究者)



中国で初めてNGO研究センターを立ち上げ、中国のNGO研究の水準を飛躍的に高めた、NGO研究、環境ガバナンスの第一人者。

芸術・文化賞

コン・ナイ
KONG Nay
(カンボジア/吟遊詩人、チャバイ・マスター)



内戦とポル・ポト時代の弾圧を奇跡的に生き延び、現在も演奏・作曲・後継者育成等の活動を精力的に続けることで、伝統的語り物音楽・チャバイの弾き語り現代に伝える、カンボジアの伝説的吟遊詩人。

第24回

2013

大賞

中村 哲
NAKAMURA Tetsu
(日本/医師)



パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続け、異文化の理解と尊重を求める国際協力を実践。

学術研究賞

テッサ・モーリス＝スズキ
Tessa MORRIS-SUZUKI
(オーストラリア/アジア地域研究者)



民族や国家の境界を越え、新しい地域協働力や市民社会の在り方を社会の端から構想し、アジアの人々の相互理解に多大な貢献を為しているアジア地域研究者。

芸術・文化賞

ナリニ・マラニ
Nalini MALANI
(インド/アーティスト)



映像や絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、世界が直面する今日的かつ普遍的なテーマに挑み続ける美術家。

芸術・文化賞

アピチャップン・ウィーラセタクン
Apichatpong WEERASETHAKUL
(タイ/映画作家・アーティスト)



民話や伝説の中に個人の記憶や前世代のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像手法で世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている気鋭の映画作家。

第29回

2018

大賞

賈樟柯
JIA Zhangke
(中国/映画監督)



21世紀の中国を代表する映画監督。急速に経済発展する社会的歪みの中で、苦悩しながらもたたかき生きる若い人々を等身大に描いた作品は、世界的に高く評価されている。

学術研究賞

未廣 昭
SUEHIRO Akira
(日本/経済学者、地域研究者(タイ))



タイ経済研究を基盤として、アジア全体の工業化や経済実態を解明し、日本のアジア研究の発展に主導的な役割を果たすなど、日本におけるアジア経済研究の第一人者。

芸術・文化賞

ティージャン・バーイー
Teejan Bai
(インド/バンダワニー奏者)



古代インドの叙事詩「マハーバータラ」に基づく歌謡のバンダワニーの第一人者。先住民であり女性であることで二重にインド社会から差別される中で歌い続け、人々に勇気を与えている。

第25回

2014

大賞

エズラ・F・ヴォーゲル
Ezra F. VOGEL
(米国/社会学者)



戦後アジアの政治経済社会の変動や、アジアの新工業地域(NIEs)の先駆的な研究に業績をもち、国際関係に関する冷静で重みのある提言を行う東アジア研究の権威。

学術研究賞

アジュマルディ・アズラ
Azyumardi AZRA
(インドネシア/歴史学者)



イスラームの宗教・文化の深い理解に基づき、多面的で調和ある市民社会の形成に尽力し、異文化間の相互理解に貢献するパブリック・インテレクチュアル。

芸術・文化賞

ダニー・ユン
Danny YUNG
(香港/文化クリエイター)



多数の斬新な舞台作品を発表する一方、文化政策や芸術教育にも取り組み、アジアと世界、伝統と現代を繋ぐ多彩な活動でアジアの芸術文化を牽引する文化クリエイター。

第30回

2019

大賞

ランドルフ・ダビッド
Randolf DAVID
(フィリピン/社会学者)



社会学者としての知見を大学、テレビ、新聞等を通じて広く市民と共有。フィリピンにおける社会的正義のために活動し、アジアの学術・文化の交流推進と相互理解の深化にも尽力した「行動する知識人」。

学術研究賞

レオナルド・ブリュッセイ
Leonard BLUSSE
(オランダ/歴史学者(東南アジア史専門家))



広汎な時空間を対象とする近世東アジア/東南アジア海域史を開拓し、学際的なアプローチに基づく歴史学を確立した歴史学者。その学問は、理想的な形のグローバル・ヒストリーとして評価されている。

芸術・文化賞

佐藤 信
SATO Makoto
(日本/劇作家、演出家)



現代の感覚と伝統的美意識を融合させた優れた舞台を数多く制作し、国内外で高く評価されている劇作家、演出家。公共劇場の芸術監督としての活動やアジアの演劇人育成にも熱心に取り組んでいる。